

「まちづくり」から「まちつかい」へ



(特非) シビル NPO 連携プラットフォーム 理事
 茨城の暮らしと景観を考える会 代表理事 三上 靖彦

先日、都市計画コンサルタント協会が日本都市計画学会等と連携して創設した認定制度である「認定都市プランナー」なる称号を頂いたが、ちょっと振り返ってみて、果たして私たち都市プランナーは、地域を元気に出来たのだろうか。地域を幸福に出来たのだろうか。

私自身、都市計画やまちづくりの専門コンサルタント歴34年、また13年前には地域の仲間たちとまちづくり NPO を設立、多様な地域振興に貢献してきたつもりではある。そして、確かにふるさと意識、郷土愛、地域に対する誇りのようなものを醸成することは出来たと思う。しかし、地域に元気はない。人々に幸せの実感はない。はっきり言って、地域は見事に衰退した。これが地方の現実だ。全国の都市プランナーと称する輩は、一体何をしてきたのか。

世の中には「住みよさ」とか「ブランド力」についてのランキングが多数出回っている。その殆どは、外部の視点からの評価であったり、施設の整備水準を競うものであったりする。地域が元気であるか、地域の人々が幸せを感じるかどうか、それを測るモノサシとして、そんな指標が役に立つのだろうか（と、「地域ブランド調査」で毎年最下位の茨城人として思う）。

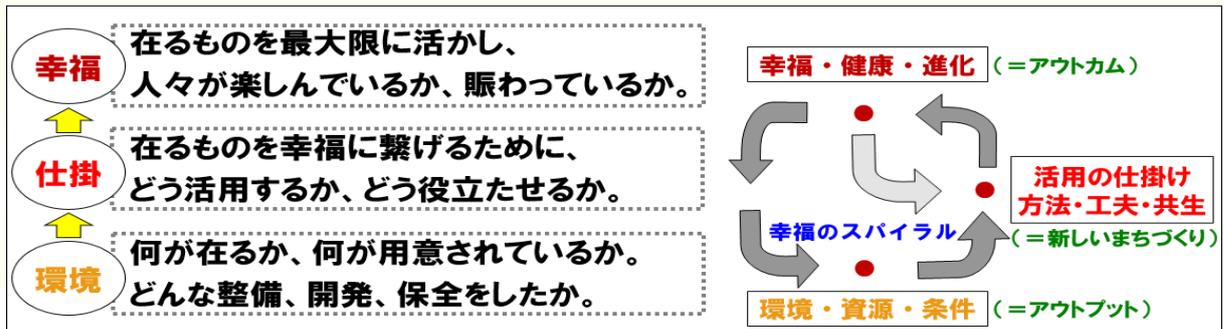
国民総幸福量世界一のブータン。実に国民の97%が「自分は幸福だ」と感じている。でも映像でブータン人の暮らし振りを見て、私たちは「その国で暮らしたい！」と思うかと言うと、それはちょっと無理。せいぜい観光で行きたい程度。でもブータン人は満足している。幸福か幸福でないかは、外部の評価ではなく、もっと自己満足的なものであるようだ。

一方、欧州の街角に立つと、私たちはそこでの人々の暮らしに憧れる。「あんな暮らししたいな」と思う。しかし欧州人にしてみれば、それはわざわざ観光用に着飾ったものではなく、自分たちの日常を見せているに過ぎない。つまり、ブータン人にしても欧州人にしても、彼らを見て分かることは「自分たちの地域の衣食住を勝手に満喫することが大切だ」と言うこと。

改めて、幸福とは何か。どうやら外部の視点でもなく、施設の整備水準でもない。地域に存在するモノを如何に活用し、暮らしの中に取り込み、満喫するか。そう言うことのようなのだ。

今までの都市プランナーの仕事は、インフラ等の施設の整備水準を高めることが中心であったが、これからの時代は、人口減少でモノ余りの時代でもあり、モノを作ること（アウトプット）よりも、今あるモノを如何に活用するか、そしてそれが地域の人々の幸福に繋がる（アウトカム）かどうか、その仕掛け・仕組みづくりが大切になる。

モノを作る「まちづくり」から、今あるモノを活用するための仕掛けを考える「まちつかい」へ。頭と技術の切り替えが勝負どころとなる。



幸福に繋がるまちづくり（まちつかい）